

「命令のノダ」とは何か

幸松英恵

キーワード：ノダ文、ノダの通時的研究、近世江戸語、命令のノダ、当為のノダ

はじめに

(いわゆる)「ノダ文」の代表的な例を挙げるとすれば、発話現場(書き言葉の場合は前後文脈)に与えられている事態の事情を説明する、次のような文になるだろう。

(1) (鞆の中をゴソゴソと探っている人を見て)「どうしたんですか」

「いやあ、大事な書類が見当たらず、探しているんですよ」

(1)は「話し手が鞆の中を探っている」という状況が発話時・発話現場における所与として存在しており、ノダ文はその事態に対する事情説明になっている。これをノダの典型用法とするのは論を俟たないと思われる。こうした平叙文としての用法以外に、聞き手に行為要求をする働きかけの文にもノダが用いられることが知られている。

(2)「ほら！早く座るんだ！」

このような文の存在は、先行研究においてしばしば「ノダ=事情説明」と規定することへの反例とされてきた。その一つである吉田(2000:17)では、次のように述べられている。

たとえば命令を表わす文に現われる「おい、大丈夫か？しっかりするんだ」のようなノダなどは、「説明」であるとは見なしたが、これらが「許してください。ほんの出来心なんです」のような典型的な「説明」の用例とどのような関係にあるのか、その内面的連関について言及する議論は少ないと言わねばならない。

本稿の目的は、この「命令のノダ」と呼ばれるノダ文を取り上げ、通時的な調査によって用法変遷の詳細を明らかにしつつ、事情説明を表す典型的なノダとの関係についてどのように捉えるべきか見解を示すことである。

1. 先行研究

命令ノダに関する先行研究として田野村(1990)、野田(1997)、名嶋(2007)の3氏の言説を取り上げる。

まず田野村(1990)は、「早くこっちに来るんだ」や「部屋を探すときはちゃんと相場を調べて

おくんですよ」といったノダの用法を「命令の用法」と呼び、「特別な固定慣用化した用法」であるとしている。そしてこれは「危険ですからのいてください」と言われて「ええんじゃ。わたしはここで死ぬんじゃ」と答えるような「話し手の意志を表す用法」と本質的に同じものであると述べている。

「つまり、例えば、同じ「行くんだ」でも、「わたしは行くんだ」のように行く主体が話し手であれば意志の表現になり、「おまえは行くんだ」のように行く主体が聞き手であれば命令になるものと思われる。両者に共通するものを求めるならば、話し手の意識の中に、自分が行くこと、相手が行くことが、実現すべきことがらとしてすでに定まっているということであり、そこから意志の表明や命令といった意味合いが出てくるものと思われる」（田野村 1990: 24 下線部は本稿筆者による）

田野村氏はノダ全般の意味特性として「命題がすでに定まっていることを示す性質」を認めている。命令ノダとは、話し手が聞き手に対して要求する動作概念にノダを添えて発話することで「実現すべきことがらとしてすでに定まっている」という意味が添えられ、「命令」という意味合いが出てくるものだという。つまり命令ノダは、「特別な固定慣用化した用法」ではあるものの、「既定性」というノダ全体を貫く意味特性においては他のノダとも共通しているということである。

次に野田（1997）では「命令」や「決意」のノダを「非関係づけ・対人的ムードのノダ」であるとする。この「非関係づけ・対人的ムードのノダ」とは、「聞き手は認識していないが話し手は認識しているQ（命題）を既定の事態として提示し、それを認識させようとする話し手の心的態度を表すために用いられるノダ」である。

「命令」のノダに関わる部分を以下に引用する。

「さて、次に、独自の性質をもつ命令の「のだ」を見よう。

(33) リカ「働け働け、働くんだ、永尾完治！」

（柴門ふみ・坂元裕二『東京ラブストーリー』 p.54）

命令の「のだ」は、聞き手が実行すべきだと話し手が考える行動を提示し、その実行を促すという点で、今まで見た「のだ」とは区別されるが、両者は無関係ではない。特に（34）のような教示的な「のだ」は、命令の「のだ」に近い。

(34) 「大人は働かなきゃいけないんだよ」

(34) は今まで見てきたような「のだ」であり、「大人は働かなきゃいけない」という判断を、話し手がその場で行なったものとしてではなく、既定のものとして示している。そして、命令の「のだ」にも同じような性質がある」（野田 1997: 101 下線部は本稿筆者による）

このような先行研究に対して、名嶋（2007）は次のように批判をしている。

「先行研究の論考をまとめると、表現こそ異なるが、ノの体言化機能とダの叙述機能から「既定事態を提示する」という点をノダの中心的機能とみなし、そこから命令という発話解釈が生じる

というのが共通した考え方であると言える。しかし、語用論的観点から言えば、「既定事態の提示」が「命令・決意」へとつながるという主張には論理の飛躍があると言わざるを得ない。先行研究では、なぜある種のノダ文が命令文として発話解釈されるのか、という点を十分に記述できていない。その原因の一つは、ノダが提示する部分を「既定化された事態」と捉え、それと「命令」「決意」という発話内行為や「発話の意味」とを直接結びつけている点にあると考えられる」

そして、自身の立場を明らかにする記述が続く。

「本書では、ノダによって提示される命題が、誰にとって好ましいのか、どの程度好ましいのか、いつ実現されるのが好ましいのか、実現させることができるのは誰か、といった発話時の状況との関連づけ（語用論的推論）を経て、「命令」「決意」といった高次表意として復元され、ノダ命令文として発話解釈される、と考える。この考え方に立てば、同一音形のノダ文が、状況によって「説明」と理解されたり「命令」と理解されたりする事実をうまく説明できると考える」（以上、名嶋 2007：183 下線部は本稿筆者による）

田野村氏や野田氏は、「働きかけの用法を持つノダ」という、一見、他の用法とは切り離された用法に見える命令ノダにも平叙ノダと共通する「既定性」を見出すことでノダの用法全体を一つの大きな枠組に収めようとしている。一方、名嶋氏は聞き手側から見たノダ文が、ある時には平叙文として理解され、ある時には働きかけの文として理解されるという事実を前に、聞き手の語用論的推論がどのようなメカニズムで行われるのかの解明に焦点が当てられている。

本稿筆者の関心は前者に近く、平叙ノダと命令ノダを繋ぐものは何か、両者の関係をどのように捉えるべきかを明らかにしようとする。さらにその際には、命令ノダがいつ頃から用いられてきたのか、その過程も含めて論じる必要があると考えている。これは、本稿筆者がこれまで江戸期のノダ文を観察・分析してきた中で、現在の命令ノダに当たるような用例は目にしていないように思うためである。命令ノダがいつ頃発生し、どのように用法が拡張してきたのかを観察することで、平叙ノダと命令ノダを繋ぐ線の手がかりが得られるかもしれないと考える。そして管見の限り、命令ノダの通時的な用法変遷について述べた先行研究は存在しないと思われるのである。

以上の経緯から、本稿ではノダ文が用いられ始めた近世に遡って調査を行い、用法拡張の過程を観察・分析しながらノダの用法間関係について解き明かしたいと思う。

2. 通時的調査

2.1 近世語のノダ系表現の抽出

ノダは近世初期に発生し、近世後期、化政期周辺から豊富に用いられるようになったと言われている（土屋 1987）。本稿で用いた近世言語資料（洒落本、人情本、浄瑠璃・歌舞伎台本、滑稽本、黄表紙）は以下の方法で用例収集を行ったものである¹。

¹ 対象とした作品は 51 作品の一覧は本稿末尾に添付する。

- 1) 国立国語研究所「日本語歴史コーパス (CHJ)」から品詞情報を利用して収集
- 2) 岩波日本古典文学大系の電子版に形式検索をかけ、確認しながら収集
- 3) 紙媒体の書籍から手作業で収集

ところで、近世語におけるノダ系表現には大きく分けて次の3種が存在する²。

- ① ノ + 断定の助動詞ダ【江戸語】
- ② ノ + 断定の助動詞相当の機能があった終助詞【江戸語】
- ③ ノ + 断定の助動詞ジャ【上方語】

本稿では、現代共通語につながる用法拡張を明らかにするという目的のもと、江戸語に範囲を絞り、上方語のノジャ (③) は参考例として扱うことにする。③を除き、直接の対象とする①と②は合わせて930例である。

2.2 近世江戸語のノダ

結論から述べると、筆者が収集した近世江戸語のノダには、現代語でいう「おい！早く座るんだ！」のような、即時の行為要求文になっているノダが1例も見られなかった。ただし、聞き手が今後取るべき行為を指示・教示していると思われるノダが4例見られた³。

- (3) 「…もし づきんはよしかへ 喜のこふともし四蝶さんの所から人がきたら。たつの口へでもいつたといつておきや。それもよし これもよしとそこらを見廻しながら かつてへいで何かわすれたやうだはへと 少しかんがへて ををそれ / \ふくい町の豊国が所から人がきたら。わすれずに此ぢうのやしきのを二分やるのだよ。とだんばしごの小引だしからうら付を出しこいつもはかなくなつたすとはいて出る。(総籬・1787)
- (4) 「しげりや。書附をとつて来や。そしての夕書て置しつた。藤さんの文を巴屋へちよつと持て往て来やよ。そして金曾木の柏屋が来たら。翁草の後篇と。拾遺の玉川を持て来など。そふいふのだよ。(春色梅児与美・1832)
- (5) 「こりや金ぼうや。おつかあはきい / \がわりいからの。あんまり世話をやかせずにおとなしくしてゐるのだよ。又明日来る時に。お土産をたんと買て来てやりませう といへばうれしそうにひざにとりつき… (仮名文章娘節用・1834)

² 本稿でカタカナ表記しているのは代表形式であり、「(カギカッコ)」付きで仮名表記するのは実現形式である。つまりノダと表記する形式には「のでございます」「のであります」「のです」等の文体的バリエーションも含まれる。「のだね」「のだよ」のようにノダに種々の終助詞が後置するものも含まれている。ノ + 終助詞とは「のさ」「のよ」「のす」の3種である。また、それぞれの中には、発音のバリエーション (ノダにおける「のだ」「んだ」など)、仮名表記のバリエーション (ノダへにおける「のだへ」「のだえ」「のだゑ」 / ノサにおける「のさ」「のサ」「ノサ」など) も含まれている。疑問の終助詞カと否定辞ナイを含む、ノカとノデハナイは別形式と考え、対象とはしていない。

³ 以下、近世語資料から用例を紹介する際には、作品名と発表年を付す。

- (6) 「…こんなさむしい処へ来て。緋鯉や亀の子が合手だから。どうでも遊びにあきるはず。これ金ぼうや。おまへは利口ものだから。おぼさんのいふことをよくお聞。あのおまへのおつかさんはの。それは / \ 遠うい処へお出だから。もう内には誰ゑもお出だはないよ。それだから内へ行ふ / \ といはずに。おぼさんの処にいつまでも居るのだよ。」(仮名文章娘節用・1834)

それぞれ「ふくい町の豊国から人が来たら、二分やるのだよ」「金曾木の柏屋がきたら、そう言うのだよ」「(お前の)お母さんは病気だから大人しくしているのだよ」「お母さんは遠いところに行ってしまったから、おぼさんのところにいるのだよ」といった意で用いられており、個別的具体的な状況下において聞き手が取るべき行動を諄々と言ひ聞かせる文として使われている。

近世江戸語の命令表現には、動詞「なさる」の命令形「なされ」(行きなされ)や派生形式「なさい」(行きなさい)を用いたもの、命令形によるもの(行け)、動詞連用形に終助詞「や」をつけたもの(行きや)、「お」に動詞連用形をつけたもの(お行き)など様々な形がある。上の用例の前後文脈にも、「いつておきや」「とつて来や」「よくお聞」といった命令表現が現れている(点線部)。こうした働きかけの文を作る専用形式⁴に対して、上例のノダは話し手の当為判断を述べたもので、あくまでも平叙文である。こうしたノダを本稿では「当為ノダ」と呼び、「命令ノダ」とは分けることとする。

上のような当為ノダは930例中たった4例という少数例ではあるものの、全て「のだ」に終助詞「よ」が後置しているという共通点があった。現代語ノダの先行研究において、田野村(1990)、野田(1997)の両者とも、命令ではない教示タイプのノダ文を挙げる際には「のだよ」を例としていた。「いいかい、～するのだよ」という当為表現のパターンは江戸期に既に発生していたと見ることができそうである。

ところで、この時期のノダ文全体を見渡すと、ほとんどが次に示すような事情説明の文である⁵。

- (7) 八内「やあ / \ 可介何だか大そうな音がしたが。たしか井戸のなかへ何かおちたよふだ可「それは大事だ / \ あかりを付て中を見る盗人だろう引ずり出してぶち殺せ / \ 角「やあ引窓が明て居るは引窓から井戸のなかへ人がおちたのだ」(明烏後の正夢・1821)
- (8) 長「米八さんを案じて此御屋敷へも一所においでか丹「なに / \ そふいふ訳じやあねへが。米八にすこし頼んだことがあつて来たのだ。」(春色梅兎与美・1832)

(7)は大層な音がしたという状況に対して「井戸の中へ人が落ちたのだ」と事情説明しており、(8)はこの屋敷に来た理由を釈明する状況で「米八に少し頼んだことがあつて来たのだ」と事情説明している。

こうした事情説明としてのノダ文の中には、二人称主体、意志動詞、話し手が聞き手に対して

⁴ 江戸語の行為要求表現の形式については、近世後期江戸語の言語資料(洒落本、人情本、滑稽本)を調査した福島(2015)を参考にした。

⁵ 近世江戸語のノダ文については、幸松(2020)でも詳しく論じている。

行為希求しているという文法的・発話現場的な条件に支えられ、結果的に聞き手に対する行為要求の意味を含むものが見出せる。

- (9) 鯉「左様して旦那。此お舟は
惣「大棧橋へ附て其お楽様とかいふのを呼ぶとして最すこし喰物を入れて垢離ばへ。しばらく繋うのだ。(春色江戸紫・1864)

- (10) 卒「こふしてマア。どふするのだヨ。
泥「ハテ細工は流々仕上を見なせへ。(中略) よしか。そこで。しばらくおれが年寄の卒次よ。おめへは泥蔵となつて。村ざかいまでふたりで行は。よしか。すると堅めの役人衆が。おれをおめへだと思つてつかまへよふとするは。よしか。そこでおめへが大きな声で。卒次さんまちなせへ／＼と。おつかけるふりをしてにげるのだ。(明烏後の正夢・1821)

(9) で「この船は (どうするのか)」と問いかけられた話し手が「垢離ばへ繋 (もや) うのだ」と答えている。発話現場で問題になっている船の処遇について「(この船はどうするのかと言えば) 隅田川べりにつなぐのだ」と述べていることから事情説明の文だと言える。これは本来のノダの用法である。しかし同時に呉服問屋の跡取りである惣次郎が直接船を杭に繋ぎ止めることはしないので、繋ぐ主体が聞き手 (二人称) であると考えれば、結果として聞き手に対する行為要求にもなる。繋ぐ主体に自身 (一人称) を含めているとしたら、意志表明になると言えよう。(10) も同様である。「どうするのだよ」と善後策を問いかけられた話し手が「よしか」以降、手順を説明している。その中で「役人が俺をお前だと思つて捕まえようとするから、お前が大きな声で卒次さん待ちなせえ待ちなせえと追っかけるふりをして逃げるのだ」と指示している。「(次にすべきことは何かと言えば) 逃げるのだ」と考えれば事情説明の文であるが、話し手が聞き手の取るべき行為を指示しているという状況下において、結果としては行為要求文になっていると言える。

現代語を例にすると「この報告書は？」と聞かれた人が「これはお前がやるんだ」と発話した場合、「この報告書は、お前がやるものだ」という事情説明文としても受け取れるのと同時に、話し手が「お前がやる」という行為を聞き手に対して希求しているという状況下において行為要求の意味合いも持ち得る。事情説明とは二つの事態の繋がり関係、つまりシンタグマティックな関係による意味であり、行為要求というのは発話における話し手の伝達的な態度の選択、つまりパラダイグマティックな関係による意味であるので、両者の併存に矛盾はない。事情説明と行為要求が排他的な関係にない以上、「どちらとも取れる」例が出てきてもおかしくないことになる。

以上、近世江戸語を調査した結果をまとめると、次のようなことが言える。

- ① 「こら、座るんだ！」のような即時の命令は、筆者が調べた 51 作品 930 例中には見当たらなかったため、近世江戸語では未だ使用されていなかった可能性がある。
- ② 「あんまり世話を焼かせずにおとなしくしているのだよ」といった当為ノダが少数ながら見られた。4 例全てが「のだ」に終助詞「よ」を伴うものであった。

- ③ 「(この船は) つなぐのだ」のように、《主題—解説》構造をとる事情説明の文の中には、話し手が聞き手の行為を希求しているという発話現場の状況下において、結果的に行為要求の意味を持つことがある。

2.3 明治期から大正期にかけてのノダ

口語体と文語体が乖離していた近世語では、ノダは会話文中にのみ見られる形式であった。明治以降いわゆる言文一致が進み、会話文以外にもノダが現れるようになる。明治から大正期の使用状況については、国立国語研究所編『太陽コーパス』を用いて全例調査を行った⁶。

雑誌『太陽』にはさまざまな分野の記事、評論、時論などの論説、さらに文学作品も多数掲載されている。ノダ文が主文述語で用いられている例を収集したところ、4962例が抽出できた⁷。このうち、「のだ」と「のです」はざっと半数が小説など文芸作品から抽出され、残り半数は論説からの例であった。「んだ」と「んです」はほぼ全例が小説や戯曲の会話文の例であった。今回は行為要求に繋がる表現を調べるという目的から、ノデアル文は除外した。

ここに至って、発話時における即時の行為を要求しているノダ文が4例見られた⁸。

- (11) お安は早くも長五郎の袂に縋つて、『長さん、まア待つて下さい、後生だから、何卒私に免じて。え、親方……長さん。』長五郎はお安が支へるのを見向もせず、『熊公、阿魔を逃がしちやア成らねえぞ。』『親方、まア待ちなせえ。お神さん、早く謝罪ツ了ふんだ。』と、熊吉は今更どぎまぎするばかりだ。(櫛紅葉・1901〈広津柳浪〉)
- (12) 急いで奥へ駈込んだが、やがて大聲で『お父さん～～』と叫ぶのが聞える。續いて妻かよの聲で『どうしたのだい？お父さんが倒れた！あ、あんた～～』と叫ぶ。一夫が飛んで出、縁側に突立つて、
一夫 おい、徳松、大急ぎで横町の先生をお連れ申すんだ、早く～～。お父さんが倒れた！
(社会劇 都へ・1917〈坪内士行〉)
- (13) 八東 (狂氣の如く) 大がたり！
一夫 嘘ぢやない。誓文、事實だ！
八東 ハヽヽ、馬鹿、々々！
聲に驚いてはつ子が飛んで入るのを、
八東 來ちやいけない、向うへ、えヽヽ、向うへ行くんだ！
はつ去る。(社会劇 都へ・1917〈坪内士行〉)

⁶ 『太陽コーパス』とは「現代語の書き言葉が確立する20世紀初期に最もよく読まれた総合雑誌『太陽』を対象として作成したコーパス」である(『『太陽コーパス』刊行のことば』より)。1985年から8年刻みで、1901年、1909年、1917年、1925年に発行された雑誌『太陽』12冊ずつを所収している。

⁷ 内訳としては、ノダ3727例(のだ：2741例／んだ：986例)ノデス1235例(のです：890例／んです：345例)である。それぞれの例には、終助詞が後置されたものも含まれている。

⁸ 『太陽コーパス』に関しては作品名一覧を出さないため、作品の後に作者名も記しておく。

- (14) 優くも學生は盲人を扶けて船室を出でぬ。「どツこい、これから階子段だ。氣を着けなよ、それ危い。」恣て甲板に伴ひて、渠の痛入るまでに介抱せし後、「爺様、まあ此にお坐り。下ぢや耐らない、宛然釜烹だ。奈何だい、涼しかろ。」
「はい、はい。難有うございます。これは結構で。」
學生は其側に寝轉びたる友に向ひて言へり。
「おい、君、最少し其方へ寄ツた。此爺様に半座を分けるんだ。」
渠は快く其席を譲りて…（取舵・1895〈尾崎紅葉〉）

上のノダは「早く謝ってしまいなさい」「先生を早くお連れしろ」「向こうへ行け！」といった命令表現に置き換えができる。現在では一般的な用法となった命令ノダのごく初期の使用例と言える。このうち(14)の「取舵」から抽出した文は命令ノダと言える例か悩むものである。このノダは、直前に自身が発した命令文「もう少しそっちへ寄った（寄ってくれ）」に対する事情説明として述べられたものとも考えることもできる。これは近世江戸語資料で見られた(9)や(10)と同様、事情説明でありながら、同時に聞き手への行為要求にもなり得る例と言える。

こうして雑誌『太陽』から抽出された5000例近いノダ文において、現在の命令ノダに繋がる例は多く見積もっても上の4例であった。1900年代初頭において、未だ命令ノダはそれほど多用されていなかった可能性がある⁹。

一方、当為ノダの方は33例見られた。

- (15) 『A君。』と私は膝を突合せて居る友達の顔を眺めた。『斯うして天城を越すやうなことは、一生のうちに一度か二度しか有るまいね。』『さうさな、精々もう一度も来るかな。なにしろまあ能く見て置くんだね。』斯うA君が答へた。（旅・1909〈島崎藤村〉）

- (16) 「癒りますよ。おくにさん。」と先生はその情深い目を奥さんに振向けた。
「岡村君のお父さんではないが、息籠んでも三年だ。大丈夫癒つて見せますよ。」と優しく云つた。そして、瘦せた指もて看護につかれた顔に觸つて見て居た。
「では、今日からは肉汁は厭がらずに召上るんですよ。營養物が第一の力ぢやありませんか。」と枕元に編物をして居たおたつさんが云つた。（一室内・1909〈真山青果〉）

- (17) 楠見 『如何いふ方法で景氣を附けるか。何か香久子さん、成案が有りますか』
香久 『別に斬新な趣向でも有りませんが、あゝ如何も病室がガラ空きでは、見ツとも好く有りませんから、懇意な方の紹介があれば、健康な人でもよろしいから、三四人は、下宿させるのですね』
竹川 『なアーる程』
本戸 『君が云ツちやいかんねえ』
香久 『それからまア、患者が診察を受けに来た時には、直ぐと先生が出ない様に爲さつて、』

⁹ 松下（1924：221-222）では形式名詞ノの下位用法としてノダ文の用法を記述しているが、そこで紹介されているのは本稿で言うところの「事情説明のノダ」と「当為のノダ」であって、命令ノダは見られない。

今、華族の何某家に急病人が出來たので、一寸行つて居られます。既う直きにお歸りですと云つて、待たして置くのですね。』(喜劇 無能病・1909〈江見水蔭〉)

(18)『僕の氣持ばかりではないやうだが、妻にも幾分の責任があるやうに思ふがね。』と、私は落窪んだ眼で友の顔を見上げた。『それはたしかにあるさ。君の妻君はヒステリーの傾向があるよ。いつたいこの病氣といふものは我儘から來る病氣なんだ。君がさう妻君の思わくばかり心配せないで、命令した方がいゝんだよ。男性的に威壓するんだね。苛酷ぢやいけない。ちつと厳しくするんだね。』と、佐野は言つた。(なぜ母を呼ぶ・1917〈小川未明〉)

(19)『重役様だぞ、おわびをしないか。

『わしは唯だ雑巾がけをただけですがな。それが悪いのですか。

『雑巾がけを咎めるのではない、お靴をよごしたのが悪いのだ。祕書は尚ほくど〜と何か云ひつづけようと口もとを動かしたが、いつの間にか重役の姿が見えなくなつてゐたので、『以後氣をつけるのだぞ!』と云ひすて、慌て、重役の後を追ふて驅けのぼつて行つた。(創作階段の王・1925〈須藤鐘一〉)

(15)～(19)は、近世江戸語に見られた(3)～(6)の当為ノダと同用法だと考えられる。近世江戸語では4例中4例が「のだよ」文であったところ、「のだね」「のだぞ」のような終助詞のバリエーション、さらには敬体を用いた「のですね」のような文体的なバリエーションも生じていることがわかる。終助詞を伴わない「のだ」による当為文は会話文の引用や口語体の論説文の中には見られるが、実際に聞き手を前にした会話文で、聞き手が取るべき行為を教示する例においては全て終助詞を伴っているという特徴があった¹⁰。

ところで、それぞれの当為ノダが発話された状況を分析すると、発話現場において話し手と聞き手が共有する問題意識があった上で発話されていることがわかる。(16)の「如何いふ方法で景氣を附けるか」のように発話の中に明示的に現れている場合もあれば、明示的ではない場合もあるが、(15)～(19)はざっと以下のような問題意識の下で発話されていると考えられる。

- ・ 天城に再び来られるかどうか → 「もう一回来られるかどうかだから、(天城の風景を)しっかり見ておくんだね」
- ・ 元気になるにはどうするべきか → 「肉汁を嫌がらずに召し上がるんですよ」

¹⁰ 例えば小川未明「なぜ母をよぶ」には次のような文が見られる。「それを生長させていくのだ」という当為ノダは、佐野が言った言葉を引用したものであり、間接会話文である。

佐野は時々訪ねて来て私共の家庭を賑はした。彼は妻を慰めた。また私をも慰めてくれた。僕は君の書くもの、愛讀者だよ。恐らく永久の愛讀者だらう。君には好い素質がある。其れを生長させて行くのだ。きつと今冷淡である社會がいつか君の眞價を認める時があるにちがひないと言つた。

また、三上於菟吉による賭け事の心得を説いた「理詰め以外」には次のような文が見られる。これは読者一般に呼びかける態をとった文章である。

リツといふものを信ぜよ。運命の波が、突然高まり、また低くなる——この高まりに機を逸さず乗るよろこび、低まつたら退いて守る心掛け——だが、時によつては低まつたら、用心を捨て、却つて飛ぶのだ。逆手に出るのだ。逆手だつて必ずしも凶ぢやあない。

- ・ 病院を景気よく見せるためにはどうすべきか → 「3,4人を常に病室に下宿させるのですね」
／「患者をわざと待たせておくのですね」
- ・ 聞き手は妻に対してどのような態度を取るべきか → 「男性的に威圧するんだね」「ちょっと厳しくするんだね」
- ・ 重役の靴を汚した掃除夫は今後どうすべきか → 「以後気をつけるのだぞ」

以上のように当為ノダでは、発話現場における問題が話し手と聞き手によって共有されている。このように述べると、そもそも当為判断には問題意識がつきものだという反論があるかもしれない。しかし例えば「～した方がいい」「～するべきだ」などの代表的な当為判断形式は、話し手のみが当該の問題意識を有している場合でも発話が可能である。それに対してノダによる当為判断は、聞き手と話し手が問題意識を共有している必要がある（より正確に言えば、少なくとも話し手は“聞き手が問題意識を共有している”と考えている必要がある）。

例を挙げよう。床の一部が腐食して危ないということを知っている人が、そこを通ろうとしている人に対して「ここは踏まない方がいいですよ」と声を掛けることがあっても、「ここは踏まないのですよ」と言うのは相当に唐突な印象を与えるだろう。対して「この部屋の床、相当傷んでいて危ないですよ。どうにかならないですかね」とアドバイスを求められたとき「業者にでも頼むんですね」とノダ文で話し手の当為判断を述べるのは違和感がない。これは話し手と聞き手によって問題意識が共有されている上での発話であるためだろう。その問題意識が「この問題を解決するには」という隠れた主題となり、「(この問題を解決するには) 業者にでも頼むんですね (=ことですね)」というノダを許容するのではないだろうか。つまり当為ノダというのは、発話現場における問題が前提となっており、構文上、その問題意識が隠れた主題になっている文であると言えそうである。《主題—解説》構造を基底に持つという点で当為ノダも本来的なノダの用法に繋がるものであり、これが当為ノダを発生させた所以だと考えられる。

以上、『太陽コーパス』の調査から観察・分析したことを以下にまとめる。

- ① 明治以降の資料からは、発話現場における即時の行為を要求する命令ノダが見られるようになった。平叙文以外のノダ文が現れるのは近代に入ってからということになる。
- ② 近世江戸語に見られた当為ノダと同用法のノダが見られた。ただし近世江戸語では「のだよ」のみ見られたところ「のだね」「のだぞ」など他の終助詞を伴ったものや、「のですよ」のような敬体によるものも見られるようになり、バリエーションが増えた。
- ③ 当為ノダが発話される現場では、話し手と聞き手によって問題意識が共有されているという特徴がある。このことから当為ノダは、《主題—解説》構造を持つノダの基本的な使用から発生したものではないかと考えられる。

2.4 現代語におけるノダ

最後に、昭和以降から現代に繋がるノダの使用例を確認する¹¹。まず以下は当為ノダの例である。

(20)すると、父は三人の子どもをいっしょくたにかかえて、

「みんなげんきで、大きくなれよ。大吉も並木も八津も、大きくなって、おばあさんやおかあさんをだいじにしてあげるんだよ。それまでには戦争もすむだろうさ。」

「えっ、戦争すむの。どうして？」(二十四の瞳・1952〈壺井栄〉)

(21)小夜子は、十日ほど、私たちと同居した。その間、妻につれられてナイロン会社へ面接にゆき、ほぼ採用の内諾を得てきた。

「よかったね。」

「ええ、心配かけて、すみませんでした。」

「お嫁にゆくまでいるつもりで、がんばるんだな。」(帰郷・1960〈三浦哲郎〉)

(22)「僕は信じないね。そんな筈、ないじゃないか。君だって知ってるだろう」

「知っています。だけど、そうなったらしいのよ。どうしてだか解らないわ」

「とにかく医者へ行ってみるんだね」

「だって、恥ずかしいわ」(青春の蹉跎・1968〈石川達三〉)

(23)「…それでもそれがいつか戻ってくるという確信のようなものがあって、その確信が僕という存在をひとつにまとめて支えているんです。だから心を失うというのがどういうことなのかうまく想像できないんです」

老人は静かに何度か肯いた。

「よく考えてみるんだね。考えるだけの時間はまだ残されている」(世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド・1985〈村上春樹〉)

近世後期江戸語において「のだよ」という形で使われるようになった当為ノダは、その後、終助詞や文体のバリエーションを増やして現在でも盛んに用いられている¹²。そして聞き手に対し

¹¹ 現代語に関しては、『CD-ROM 版新潮文庫の100冊』(昭和以降の作品)や『現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)』、手作業で調べた小説やエッセイなどを用いた。まとまったコーパスを用いるとノダ文の例が数万件以上該当するため全数調査はできなかったが、現代小説7作品(一覧は本稿末尾に添付)からノダ文(「のだ」と「んだ」といった文体バリエーション、及びこれに種々の終助詞がついたもの)を手作業でピックアップしたものから当為ノダや命令ノダがどの程度見られるのかをパイロットリサーチ的に調べてみた。その結果、1510例のノダ文が抽出できたうち、当為ノダと命令ノダは合わせて19例であった。

¹² 『太陽コーパス』では見られなかった「の(ん)だな」も現れるようになった。「熊さんだって、少しも早く女房に樂をさせてえと思ふから、急謙つて富なんかア買うんだな」(富籤・1901〈遅塚麗水〉)のように、事情説明の文であれば終助詞「な」を伴うノダも見られたが、当為ノダとしての例は(偶然かもしれないが)見られなかった。

て今後とるべき行為として教示・指示しているという点、発話現場において話し手と聞き手の間に問題意識の共有があるという点も、そのまま引き継がれている。上例で言えば、(20)や(21)は、聞き手の身の振り方が問題になっている場で「おばあさんやおかあさんをだいにしてあげるんだよ」「お嫁に行くつもりで頑張るんだな」と発話されている。(22)は妊娠したかどうかの問題になっている場で「とにかく医者へ行ってみるんだね」と、(23)は聞き手が「心を失うということが想像できない」と困っている状況で「よく考えてみるんだね」と発話されている。

次に、命令ノダを見てみよう。

(24) 鮎太は砂の上に突き飛ばされ、上からのしかかられた。

鮎太は夢中だった。この前のように眼鼻の判らぬ程、痛めつけられては大変だったからである。

「おい逃げるんだ。多勢やって来るぞ」(あすなる物語・1954〈井上靖〉)

(25) 女は両手で顔を覆うて、部屋を駈けて出た。

柏木はというと、立ちすくんだままの私の顔を見上げて、異様に子供っぽい微笑をうかべて、こう言った。

「さあ、追っかけて行くんだ。慰めてやるんだ。さあ、早く」(金閣寺・1956〈三島由紀夫〉)

(26) あけるには、鉄棒を数字の7の字に折りまげた鍵を、戸の下方にあいている縦にほそながい鍵穴からさしいれて、内鍵の棧をもち上げねばならない。鍵がなければ、いちど、閉めた戸があくわけはなかった。

「静かにひくんだ。早くしろ。」(驢馬・1960〈三浦哲郎〉)

(27) 同時に、男は、ロープをめがけ、全身をばねにして砂を蹴上げた。「おい、上げるんだ!」石の中にもでもり込ませそうな力をこめて、十本の指を、こぶだらけのロープにからみつかせ、あらんかぎりの声をふりしぼるのだ。「上げるんだ! 上げるんだ! 上げるまで、この手は離さんからな!」(砂の女 1962〈安部公房〉)

上例は全て発話時・発話現場において聞き手が即時になすべき行為を要求している文であり、当為ノダには見られない緊迫感がある。『太陽コーパス』で初めて見られた命令ノダ(11)～(14)と同用法である。

それぞれ「おい逃げろ」「さあ、追っかけていけ」「慰めてやれ」「静かにひけ」「上げろ」といった働きかけの文に言い換えができる一方、「*おい逃げなければならない」といった当為判断文への置き換えは不自然である。このように平叙文から働きかけの文へと完全に機能移行を起こした命令ノダは、現在ではノダの用法の一角として完全に定着していると言える。

当為ノダに続いて発生してきたと考えられる命令ノダであるが、発話現場における前提の必要性は当為ノダと並行的である。つまりそれぞれの場では、「上級生から逃げなければならない」「女が泣いて逃げてしまった」「扉を開けたいが開かない」「砂穴の底から這い上がらなければならない」といった状況が話し手と聞き手によって共有されており、それを打開・解決するための行為

がノダ文によって提示されている。これが命令ノダの使用における特徴である。

例を挙げて考えよう。ある兄弟が部屋を共有している。兄は勉強に集中したいが、弟は大音量で音楽を聴いている。弟は音楽に夢中で兄の苛立ちに気づいていない。そのとき兄が「おい、音量を下げろよ！（下げてくれよ！）」と命令することはあっても、突然「おい、音量を下げるんだ！」と命令するのはやや唐突な感じを受ける。それを聞いた弟が音量の下げ方に四苦八苦しているのを見て「ほら、そのボタンを押すんだ！」と指示するのは違和感がない。この場合、両者に「どうやって音量を下げるのか」という問題意識が共有されているためだと考えられる。

つまり当為ノダと命令ノダは「発話現場における話し手と聞き手の問題意識の共有」つまり「前提の必要性」という使用条件の点で繋がるのであって、命令ノダは当為ノダの使用の延長線上にある用法だと思われる。この点について次節で詳しく分析する。

3. 当為ノダから命令ノダへ

3.1 当為ノダの発生

もともとノダは〈形式名詞（準体助詞）ノ+断定辞ダ〉という組成を持ち、ノによって命題部分を体言句相当にして、その後に断定をするという形式である。物事を措定したり同定したりする名詞述語文「一ハダ」を、事態間関係に拡大した「(一ノハ)一ノダ」という《主題—解説》構造を基底に持つことによって、ある事態（主題）に対する解説（事情説明）を述べる文として文法化したと考えられる¹³。そこで近世後期に使用が一般化したノダ文は、多くが次のような事情説明の文であった。

(28) 長「米八さんを案じて此御屋敷へも一所においでか

丹「なにノソふいふ訳じゃあねへが。米八にすこし頼んだことがあつて来たのだ。」((8)
再掲：春色梅兎与美・1832)

米八さんを案じて来たのか、と問われた話し手が「(私がこの屋敷に来たのは)米八に少し頼んだことがあつて来たのだ(=来たということだ)」と答えている。《主題—解説》構造が基底にあるからこそ、発話現場において前提となる事態が隠れた主題として意識されるのであり、ノダによって提示される内容は事情説明として理解される。このような平叙ノダの使用を背景にして、発話場で共有されている問題意識に対する解決策を述べる当為ノダが発生して来たと考えられる。

(29) こりや金ぼうや。おつかあはきいノがわりいからの。あんまり世話をやかせずにおとなしくしてゐるのだよ。((5) 再掲：仮名文章娘節用・1834)

母親の病状が思わしくないという状況に置かれている子どもに対し「(状況をよくするには)おとなしくしてゐるのだよ(=おとなしくしていることだよ)」と教えている。平叙ノダの基底にあった《主題—解説》はここでは《課題—解決》に形を変えつつも、共有する前提事態に対して別事態を提示するという構造は共通している。

¹³ ノダ文全般に関する筆者の考えは、筆者の博士論文である幸松（2012）で詳述している。

平叙ノダ：「(—スルトイウコトハ) —スルトイウコトダ」

「(私が鞆を探っているのは) 大事な書類を探しているのだ」

当為ノダ：「(—スルニハ) —スルコトダ」

「(大事な書類を見つけるには) 鞆の中をよく探すのだね」

筆者による通時的な調査によって少数ながら人情本や洒落本の中に用例が見られたことから、この当為ノダは近世江戸語においてすでに用いられていたことがわかる。ノダについてまとまった論考が見られる嚆矢とも言える松下(1924)では、形式名詞ノの用法の一つとしてノダ文を挙げ2つの意味があることを示しているが、その一つは「事情」であり、もう一つは「意志的当然(命令、決心)」であった。後者の「意志的当然」は「「べし」の意になる」と記されており、本稿のいう当為ノダである¹⁴。このことから、1900年代前半には当為ノダの用法が定着していたとみられる。その一方で、「座るんだ!」のような働きかけ文に移行した命令ノダについての記述はないので、当時はまだ用法が定着しきっていなかったと考えられる。ノダはまず平叙文の一角である当為判断文から派生し、その後、即時的な働きかけの文へと使用の幅を広げていったのではないだろうか。

3.2 命令ノダの発生とノダの文法化

命令ノダの使用に関しては筆者が調査した『太陽コーパス』では少数ながら「おい、徳松、大急ぎで横町の先生をお連れ申すんだ」「向うへ、え、向うへ行くんだ!」といった例が見られた。要求の緊迫度が高い命令ノダは、当為ノダが定着したのちに、近代以降になって用いられるようになったと考えられる。

当為ノダは、話し手が聞き手に対して要求している行為を表す意志動詞にノダを後置させ、行為要求表現と親和性の高い「よ」を添えて¹⁵「おとなしくしてゐるのだよ」と発話したものであった。その終助詞の存在が「諄々と言ひ聞かせる」「教諭す」といった話し手の伝達態度を表していたと考えられる。命令ノダは、その終助詞が落ちたことで行為要求に対する緊迫の度合いが上がり、動詞命令形などによる命令表現に置き換えられるような意味合いを持つようになったと考えられる。現在でも、「考えてみるんだよ」「考えてみるんだね」「考えてみるんだな」など終助詞を伴って発話すると、長期的な視点でみた助言・忠告というニュアンスが強くなるのに対して、「考えてみるんだ」と終助詞を落として発話するとたちまち「今・ここで」という即時の行為要求というニュアンスが前景化するように思える。

¹⁴ 松下(1924:221-222)では「意志的当然」の例として「いけないつて云つたら、はいつて云つてやめるのよ」「何、入学試験か。兎に角受けて見るんだなあ」が挙げられている。

¹⁵ 鶴田(1924:208)は『日本口語法』で終助詞「よ」の意味として「叙述を確かにする。多く命令禁止の時に用ゐる。しかしこれが命令形の一部だと考へるのは誤りである」と述べている(下線は本稿筆者による)。湯澤(1981:700)は『増訂 江戸言葉の研究』で「終助詞「よ」は「文の終わりにあつて感動の意を表す」とだけ述べているが、やはり挙げられている例は終止形に後置する例と命令形に後置する例が混ざっている。国立国語研究所(1951)『助詞・助動詞の研究—用法と実例—』では、「よ」を「断定、言い張る、言い聞かせる気持ちで念を押す」の意味を添えるとして、例文の一つに「篤、自動車に気をつけるんだよ」という当為ノダを挙げている。

ところで、〈形式名詞+ダ〉を組成に持つ形式が当為判断に用法を拡張するのはノダに限ったことではない。モノ、コトに断定辞がついたモノダ、コトダもノダと同様、当為判断を表す用法を持つ。「人の好意はありがたく受け取るものだ」「合格したいなら、とにかく勉強することだ」などは「人の行為はありがたく受け取らなければならない」「合格したいなら、とにかく勉強するべきだ」といった当為判断文と同義である。モノダは一般的な当為判断に偏り、コトダは個別具体的な当為判断に用いられることで知られているが、当為ノダは個別具体的な当為判断であるため、結果として当為コトダと類義表現になる。前出の(20)～(23)の当為ノダは、以下のよう
に全て当為コトダに置き換えることが可能である¹⁶。

- (20)' 「おばあさんやお母さんをだいじにしてあげることだよ」
- (21)' 「お嫁にゆくまでいるつもりで、がんばることだな」
- (22)' 「とにかく医者へ行ってみることだね」
- (23)' 「よく考えてみることだね」

一方、命令ノダはコトダに置き換えることができないことから、働きかけの文を作る機能を持つ形式として文法化したのはノダのみであることがうかがえる。

- (24)' 「?おい逃げることだ!」
- (25)' 「?さあ、追っかけていくことだ!」
- (26)' 「?ドアを静かにひくことだ!」
- (27)' 「?ロープを上げることだ!」

コトには「湯船に入る前に体を洗っておくこと」「レポートは今日中に提出すること」のような表現もあるが、これは規範的行為を提示する文であり、不特定多数の聞き手（読み手）に注意喚起したりスローガンのように示したりもできる点で、常に聞き手が必要な命令ノダとは異なる。平叙文から働きかけの文まで文法化が進んだという点で見れば、ノダの文法化の段階は突出しているということもできる。

3.3 当為ノダ、命令ノダの関係、事情説明の文との関係

これまで、当為判断文である当為ノダが最初に発生し、その後、働きかけの文である命令ノダへ用法が拡張したとして、両者を分けて論じてきた。しかし実際のところ、終助詞を伴わない「のだ」や「んだ」による文の中には、当為ノダか命令ノダか判然としない場合もある。『太陽コーパス』から得られた例までは、間接的な発話ではなく、話し手を前にして当為判断を述べる際には終助詞が添えられるケースばかりであったが、現代語では終助詞を伴わずに発話されることもある。

(30)「おい、自分に勝った奴をあんまり誉めると、負けぐせがつくぞ。」

先生が声を飛ばした。

「練習の時にも悔しいと思う気持ちを持つことが大切だ。じゃないと本番でも馴れ合ってしまう

¹⁶ 若干のニュアンスの変化はあるが、モノダの場合は、置き換えそのものが不自然である。

う。練習で闘志を剥き出しにするやり方を覚えるんだ」(蹴りたい背中・2003〈綿矢りさ〉)

部活の顧問である先生が、生徒に対して練習の際の心構えを伝えている状況である。「どうすれば勝てるのか」という課題が共有されていて「悔しい気持ちを持つことが大切だ」「闘志を剥き出しにするやり方を覚えるんだ」という当為判断が述べられている。これが「いいかね、やり方を覚えるんだよ」と終助詞を伴った文であり、教え諭す口調で述べられていれば典型的な当為ノダと言いやすい。しかし実際の例では終助詞を伴っていないことから、仮に強い調子で「(いいか、ここで) 覚えるんだ!」といった口調であったとすれば限りなく命令ノダに近づいていく。

以下の例では、話し手(博士)が自分の家に通って来ている家政婦に対して、家政婦の息子が待つ家に今すぐ帰るように、そして明日からはその息子も仕事場に連れてくるように命令・指示している。

- (31)「…すぐに帰りなさい。母親なら、自分の子供のために食事を作ってやるべきだ。さあ、今すぐ、家へ帰るんだ」博士は私の腕をつかみ、玄関まで引っ張って行こうとした。
「もう少し、待って下さい。あとこれを丸めて、フライパンで焼くだけなんです」
「そんなもの、どうだっていい。ハンバーグを焼いている間に、子供が焼け死んだらどうするつもりなんだ。いいかね。明日からは、息子をここへ連れて来るんだ。学校から直接、ここへ来るようにすればいい。…」

上例の「さあ、今すぐ家に帰るんだ」の方は「今すぐ」とあるように即時の行為要求であり、「さあ」という行為を促す表現と共起している。後者の「いいかね。明日からは、息子をここへ連れて来るんだ」の方は「明日からは」とあるように、発話時の翌日以降に関する指示になっており、「いいかね」という教え諭す際に用いられる表現と共起している。前者は「よ」や「ぞ」といった終助詞との共起は非常に違和感があるが、後者は仮に共起しても違和感がない。このような違いから、前者は典型的な命令ノダであって、後者はそうではない、と言えるかもしれないが、ここまでくると両者の間に境界線を引くことにそれほど大きな意味があるとは思えなくなってくる。

つまり、二人称主体、意志動詞という文法的条件、そして話し手が聞き手にその行為を要求しているという語用論的条件が揃った時、当該ノダが行為要求の表現になることは間違いのないとしても、要求の緊急度には程度性があることから、当為ノダと命令ノダは常に截然と区別できるわけではなく、連続的な面があるということである。

ノダが用法を拡張していく過程で、ある時期まで終助詞が大きな役割を果たし、その意味が定着したところで終助詞が必須ではなくなるという現象、そしてその結果として他の用法との関係性が曖昧になっていくという現象は、当為ノダや命令ノダ以外の用法でも見られることである¹⁷。

¹⁷ 例えば「発見のノダ」と言われる用法(外を見て「あ、雨が降っているんだ」、相手の話を聞いて「へえ、そんなに嬉しかったんだ」など)には世代差があり、上の世代ほど「のか」や「のだな」といった終助詞付きの形式でなければ不自然に感じるという。また「実は、今度引っ越すんです」と相手が知らないことを教えたり、謝られて「あ、いいんですよ」と話し手の評価判断のみを伝えたりする用法(事情説明を表さない用法)は近世後期江戸語の「のだ」文には見られず、終助詞「さ」を伴う「のさ」文が担っていた。発見のノダについては幸松(2019)、事情説明を表さないノダについては幸松(2020)を参照。

このノダ系の表現の用法拡張と終助詞の問題というのは通時的に見て興味深い問題であり、今後の課題としたい。

おわりに

ノダは、その形式自体が特定の意味を持っているわけではなく、ノという形式名詞（準体助詞）により、前置する部分を体言相当句としてまとめ、それを断定する機能を持つ形式である。江戸時代後期から多用されるようになったと言われるノダは現在に至るまでに実に様々な用法を派生させてきた。その中でも「ほら、早く座るんだ！」という命令ノダは、一見、他の平叙ノダとはかけ離れた用法のように見える。

しかし通時的な調査を経て、事情説明のノダから一足飛びに命令ノダが派生して来たわけではないことがわかった。段階としては、まず「いいかい、早く座るんだよ」のような当為ノダが発生し、そこから終助詞が落ちて「ほら、早く座るんだ！」という即時の命令に拡張していった、という道筋が描けそうである。

本書筆者の観察からは、当為ノダや命令ノダが発話される現場には「この状況を打開・解決するには」という隠れた主題が存在していた。これは、《主題—解説》構造を基底として発生した事情説明のノダと重なるところである。すなわち、ある課題に対して、ある動作概念を提示することで「(—スルニハ) —スルコトダ」という意味を実現する当為表現が生まれ、そこから聞き手への教諭的な意味を添える終助詞が落ちたことで即時の命令の意味合いを持つようになったのではないかと考えるのである。

さらに、隠れた主題を前提としているという点で、事情説明のノダと当為ノダ、命令ノダは共通するため、連文関係としては事情説明であり、文の機能としては命令であるという文も珍しいものではない。ノダ文が命令を表しているとき、我々はその機能に目を奪われがちになるが、その裏側には何らかの課題意識が隠れており、それが主題となっていて、その主題に対する解説になっているという従来の枠組みに収まっているケースが往々にして見られるのである。

本稿冒頭では吉田（2000）による「説明のノダと命令ノダの関係について明らかにされていない」という問題提起を紹介した。その吉田氏自身は、吉田（1988:49-50）の中で、ある動作を指し示しているだけの表現が、語用論的な条件のもと決意や命令といった表現になるという見解を示している。これは動作概念を表す単語をそのまま聞き手に投げつけることで、語用論的な意味として命令の表現になるという尾上（2001:99-107）の論考に倣ったものである。

確かに日本語では、「さっさと座る！」のように、テンス・ムードの面で形式分化を持たない動詞の原形でもって命令を表すことがある。ノダはいわば無色透明な形式であるので「座るんだ」も「動作概念だけを発話場に投げ出す」ことになるのかもしれない。しかしそれでは何故ノダ文なのかという説明がつかないだろう。すなわち吉田氏の説明では、「座る！」と「座るのだ！」の違いは明らかにならないのである。動作概念だけを投げ出しているのではなく、そこには「のだ」が添えられているのであり、「のだ」があるからには、何らかの意味があるはずである。本稿筆者は、ノダで述べることによって主題（ここでは課題）を含意させるという違いを見出す。それがノダ文から当為ノダ、さらには命令ノダが派生した理由だと考えるのである。

引用文献

- 尾上圭介 (2001) 『文法と意味 I』 くろしお出版
国立国語研究所 (1951) 『現代語の助詞・助動詞 一用法と実例一 (国立国語研究所報告 3)』 秀英出版
田野村忠温 (1990) 『現代日本語の文法 I 「のだ」の意味と用法』 (復刊 和泉書院 2002 年)
土屋信一 (1987: 再録 2009) 「浮世風呂・浮世床の「のだ」文」『近代語研究』7 武蔵野書院 再録『江戸・東京語研究—共通語への道』 勉誠出版
鶴田常吉 (1924) 『日本口語法』 南郊社
名嶋義直 (2007) 『ノダの意味・機能—関連性理論の観点から (日本語研究叢書)』 くろしお出版
野田春美 (1997) 『「のだ」の機能』 くろしお出版
福島直恭 (2015) 「後期江戸語における行為要求表現の諸相」『学習院女子大学紀要』17, pp.129-146
松下大三郎 (1924) 『標準日本文法』 紀元社
幸松英恵 (2012) 「「ノダ」文による《説明の構造》」博士論文 (東京大学)
幸松英恵 (2019) 「〈発見〉の文の「一か」と「一のか」について」『東京外国語大学論集』98, pp.167-190
幸松英恵 (2020) 「事情を表わさないノダはどこから来たのか—近世後期資料に見るノダ系表現の様相—」『東京外国語大学 国際日本学研究』プレ創刊号, pp.162-178
湯澤幸吉郎 (1981) 『増訂江戸言葉の研究』 明治書院
吉田茂晃 (1988) 「ノダ形式の構造と表現効果」『國文論叢』15, pp.46-55
吉田茂晃 (2000) 「〈ノダ〉の表現内容と語性について—〈ノダ〉は「説明の助動詞」か」『山辺道』44, pp.17-31

使用した言語資料

【歌舞伎・浄瑠璃作品】 傾城壬生大念仏、幼稚子敵討、お染久松色読販、小袖曾我薊色縫、名歌徳三舛玉垣、神霊矢口渡、景清、助六、鳴神、毛抜、韓人漢文手管始、夏祭浪花鑑、鎌倉三代記、新版歌祭文、假名手本忠臣蔵【人情本】 花廻志満台、春色梅兒譽美、春色江戸紫、春色辰巳園、 仮名文章娘節用、恋の花染、春色連理の梅、明烏後の正夢、閑情末摘花、今様操文庫、風俗吾妻男、清談峯初花、春色恋廻染分解【洒落本】 郭中奇譚、俠者方言、南閩雑話、甲駟新話、当世左様候、深川新話、総籬、仕懸文庫、花街鑑、花街寿々女、卯地臭意、辰巳之園、青楼昼之世界錦之裏、軽井茶話道中粹語録、傾城買四十八手、傾城買二筋道【黄表紙本、滑稽本】 江戸生艶気樺焼、手前勝手御存商売物、大極上請合売心学早染艸、文武二道万石通、榮花程五十年蕎麦価五十銭見徳一炊夢、東海道中膝栗毛、浮世風呂

- 国立国語研究所編 『日本語歴史コーパス』 (CHJ)
国立国語研究所編 『太陽コーパス』
新潮社 『CD-ROM 版新潮文庫の 100 冊』 (発行 1995 年)
国立国語研究所編 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』 (BCCWJ)

現代語の全数調査に使用した作品：

- 『哀しい予感』 吉本ばなな 1988 年／『5 分後の世界』 村上龍 1994 年／『柔らかな頬 (上)』 桐野夏生 1999 年／『東京タワー』 江國香織 2001 年／『博士の愛した数式』 小川洋子 2003 年／『蹴りたい背中』 綿矢りさ 2003 年／『さようなら、私の本よ！ 第 1 部』 大江健三郎 2005 年

(ゆきまつ はなえ 東京外国語大学世界言語社会教育センター 講師)

What is “*Meirei-Noda*”:

A diachronic study on the Imperative Noda

YUKIMATSU Hanae

KEYWORDS: NODA sentence, diachronic study on Noda, *Meirei-Noda*

Noda sentence is usually categorized as a type of Declarative Sentence. However, it can be similar to Imperative Sentence in meaning when it satisfies certain syntactic and pragmatical conditions, such as when the agent is the addressee, the sentence has volitional verb, and the speaker wants the action to be done by the addressee.

This paper studies this kind of NODA sentences by analyzing examples from the late Edo period, in order to explain the ambiguity of the range of usage of the modern NODA sentences. By the diachronic research, these Noda will be divided into two patterns. One is *Toui* (Sollen)- *Noda*: which means “you should do” as a part of a Declarative Sentence and have been used from the late Edo period. The other is *Meirei* (Command)- *Noda*: which means “Do (something)” as an Imperative Sentence and seems to be used since the Meiji period.

Both Noda seem a kind of auxiliary verb in a grammaticalized form. However, these Noda sentences keep the nature of the noun-predicate sentence. On the basis of the essential construction of “X-wa Y(-no)-da,” both *Toui-Noda* and *Meirei-Noda* still need a certain theme(topic) in each sentence. And the Noda sentences are to be expressed as a solution for the theme.